様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2012～2013
課題番号：２４８２００１０

研究課題名（和文）近現代フランスにおける哲学と心理学の関係

研究課題名（英文）A study on the relationship between philosophy and psychology in France

研究代表者
新田　昌英（NITTA, MASAHIDE）

東京大学・人文社会系研究科・助教

研究者番号：７０６３４５５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,300,000円、（間接経費）　690,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀末フランスにおける哲学と心理学の関係、なかでも反省哲学派と呼ばれる哲学の潮流と当時の実験心理学および折衷主義哲学の心理学の関係について研究した。研究成果は日仏哲学会2013年春季大会で発表した。哲学者アランの生地モルターニュにあるアラン博物館で文献調査を行い、1920年代から30年代にかけてアランが寄稿していた心理学雑誌の目録を作成した。フランス国立図書館では、主にアランの心理学講義に関する草稿調査を行った。1909～11年とのものと推定される「感情の哲学」を参照し、以前に作成した翻刻を修正したほか、1920年代の講義録の調査を行った。

研究成果の概要（英文）：In this project, we conducted research on the relationship between philosophy and psychology in France at the end of the nineteenth century. In particular, we focused on the relationship between so-called reflexive philosophy, the experimental psychology of that period, and the psychology of spiritualist philosophy. Results of this research were presented at the 2013 spring conference of the Franco-Japanese Society of Philosophy. We also conducted a bibliographic survey at the Musee Alain de Mortagne, and created a bibliography for a journal of psychology, for which the philosopher Alain wrote articles between the 1920s and 1930s. At the Bibliotheque nationale de France, we examined Alain's manuscripts of his lecture on psychology that he gave in the 1920s. We were able to correct errors in the transcription of a manuscript titled "Philosophie des sentiments," which is estimated to originate between 1909 and 1911.

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：思想史

キーワード：心理学史　フランス　思想史　フランス反省哲学　アラン　実験心理学

１．研究開始当初の背景

今日、「心理テスト」が余興として楽しまれるほどに心理学は広く認知され、独立した学問の一分野とみなされている。しかし西欧の学問的伝統の中で、心理学はもともと哲学の一部に位置づけられ、もっぱら哲学者の講ずるものであった。実際、19 世紀フランスの哲学教育では、心理学は哲学の基礎分野とみなされていた。このことを考慮すると、哲学者が心理学を論ずるという行為は、心理学が独立した分野としての制度を整えるにしたがって、哲学とは何かという問いの立て方に根本的な反省を迫るような仕方で変容を被ったと推定せざるを得ない。

20 世紀フランスの哲学者カンギレムは、「心理学とは何か」と題した論文で、心理学の拠って立つ実証主義的な客観性を批判し、心理学者が管理社会の権力と取り結ぶ関係について警戒するよう促した。カンギレムはその問題意識を、同時代に心理学を論じた弟子のフーコーと共有している。二人はともに哲学の営みとして心理学を外部の対象に設定し、その科学性に認識論的な批判を加えている。とはいえ、フーコーは「哲学と心理学」という対談で、19 世紀以来哲学と心理学が「非常に錯綜した関係」にあることを指摘してもいる。哲学から独立したかに見える心理学は、実際には実証主義という哲学的パースペクティヴと結びついている。一方、事物としての人間が自然科学の手法で探求されていく時代に、哲学は超越の探求をやめ、有限な存在としての人間を探求する学問になったという。

２．研究の目的

本研究は、上記のような哲学と心理学の「錯綜した関係」の見取り図を、哲学者の心理学受容と批判という観点から再検討することを目的とする。すでに見た 20 世紀フランスの哲学者による心理学批判は、19 世紀末から 20 世紀初頭の哲学者たちにその祖型を求めることができる。カンギレムの初期思想形成に決定的な影響を与えたアラン（エミール・シャルチエ）は、心理学者の行う推論や証明を独自の認識論的立場から吟味し、心理学の偽科学的性質を批判してやまなかった。アランの心理学観と認識論は、彼の師であるラニョーの知覚理論や独自の哲学的な「心理学」をその出発点としている。さらにラニョーの思想は、「心理学と形而上学」と題した論文で超越論的な観念論の立場から当時の思弁的な心理学と実験心理学をともに批判したラシュリエの影響下にある。このように、哲学の営みとしての心理学批判は、第三共和政期の哲学者たちへその系譜を辿ることができる。

こうした事実は、普仏戦争敗北後の 1870 年代以降、フランスの高等教育機関での科学教育充実が叫ばれる中で、実験心理学がアカデミズムに浸透してゆく歴史的経緯と切り離すことができない。フランス実験心理学の父と称されるリボーは、イギリスやドイツの実験心理学を紹介するとともに、フランスで初めて実験心理学の研究論文により博士号を取得した。1880 年代にはフランスの大学で初の実験心理学の講座を担当した後、アカデミズムの一つの頂点をなすコレージュ・ド・フランスの教授に就任した。フランスの心理学史で実験心理学の草創期とされる時期は、リボーが展開した心理学の（哲学からの）独立運動のあゆみと、彼自身の栄達の歴史と重なっている。一方、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての時期は、勃興期の哲学ジャーナル（『哲学評論』、『形而上学道徳評論』等）を舞台に、哲学者が実験心理学の成果を取り入れつつも、心理学者を批判するという図式が明確になってくる時期でもある。近年さかんになりつつあるフランスの心理学史研究では、19 世紀後半まで折衷主義哲学（éclectisme）の一部であった心理学が、実験心理学の輸入とともに独立した分野として成長し、さまざまな学派が発展していく経緯を記述することが多い。しかし心理学からいわば巣立たれた側の哲学が、フランスの心理学史上きわめて重要な時期に、心理学に対して自己の領域をどのように規定していったかという問題について、これまで系統だった研究がなされてきたとは言いがたい。

上記のような欠落を補おうとする本研究は、19 世紀末から 20 世紀前半にかけて活躍した哲学者アランに関する代表者の博士論文を出発点としている。生理学的なアプローチによる実験心理学の感情研究が、デカルト以来の伝統的な情念論にとってかわろうとしていた時代に、情念（passion）を根本概念として人間の諸側面を考察したアランの哲学は、実験心理学の認識論的批判をその本質的契機とする反時代的な試みであった。代表者はアランの初期論文などに現れる心理学批判や未刊の講義草稿に注目し、この哲学者と同時代の心理学者との影響関係を実証的に検証しつつ、情念論と実験心理学との関係を解明した。その過程で 19 世紀フランスにおける哲学と心理学の関係について予備的考察を行い、リボーをはじめとする心理学者の哲学批判と、リボーと同時代の哲学者が展開した心理学批判について論じた。ラシュリエ、ラニョー、アランといった 19 世紀末の実験心理学勃興期に生きた哲学者たちは、人間の自然科学的研究がもたらす成果を認めつつも、それに収まらない領域を本来の精神の学すなわち哲学の営みとして探求しようとしていた点で共通している。新カント主義の影響を受けた彼らは人間の認識能力の有限性を認めつつも、個人の心理が普遍的あるいは形而上学的な思考の領域を前提としていることに注意を喚起しようと務めていた。彼らの仕事は、観念論や主知主義と総称して済ませるべきではない豊かな洞察を含んでいる。20 世紀のカンギレムやフーコーに先立つ心

理学論が到達しようとしていた「真の精神の学」がどのようなものであったかを解明することができれば、有限の領域を探求する学へと哲学が変質したことを説くフーコーの見取り図には再考の余地があるのではないか、という直感から本研究は着想された。

３．研究の方法

A．ラシュリエとラニョーにおける哲学と心理学の規定および「精神の真の学」。

ベルクソンが博士論文を捧げた人物として知られるジュール・ラシュリエは、哲学者としての教育活動と著作によって、また視学総監として後進への実際的な援助によって、19 世紀末から 20 世紀初頭の多くの哲学者に影響を与えた。公刊した著作の数は少ないものの、「帰納法の基礎」や「心理学と形而上学」等の論文は後世まで読み継がれた。ジュール・ラニョーはリセの哲学教師としてアランの思想形成に決定的な影響を与えた人物として知られている。哲学と心理学の関係という問題系について、二人の哲学者にはいくつかの共通点を指摘することができる。まず、両者ともに 19 世紀末の心理学の状況を俯瞰しつつ、対立する二つの心理学とみなされていた折衷主義の心理学と実験心理学の双方に認識論的な批判を加えている。さらに、「精神の真の学は心理学ではなく、形而上学である」として心理学に対する哲学の優越を説くラシュリエの立場は、独自の哲学的な「心理学」を展開したラニョーにも通底する。新しい心理学が姿を現してきた時代に、それらがなお汲み尽くしえぬ領域があると考え、その探求こそが哲学の仕事であると考えた哲学者たちの構想した「精神の真の学」が問題となる。

とはいえ、ラシュリエとラニョーの立場を完全に同一視することはできない。高等師範学校でラシュリエに師事したとされるラニョーの断片集には、ラシュリエの立場から距離を取ろうとする努力の跡が認められる。次世代のアランへと受け継がれていくであろう心理学批判と「精神の学」が辿った変遷についても考察する必要がある。

B．ラニョーとアランの心理学論。

ラニョーの死後、アランはその遺稿集の編纂を繰り返し手がけ、後に『ジュール・ラニョーの思い出』という回想記を出版するなど、師への敬慕の念は変わらなかった。思想的に見ても、初期のアランが展開した知覚の理論は、ラニョーのそれと区別がつけがたいほどに類似している。心理学への批判的な見方もアランがラニョーから受け継いだものであるように見えるが、継承の内実がどのようなものであったかについては検討の余地が大きい。デカルト主義者として知られるアランが姿を表してくるのはラニョーの死後であり、アランの思想には変化が認められる。またアランが触れることのできた心理学の成果は、ラニョーの時代のそれとは異なっている。近年、初期のアランが行った心理学講義の聴講ノートが発見され、アランの心理学講義の構成がラニョーの講義に類似点があることが指摘されているが、代表者が提出した博士論文で示したような、アランの具体的な心理学受容状況を考慮した体系的な比較研究はまだ行われていない。本研究ではこれらの新しい資料を活用しつつ、カンギレム、フーコーら 20 世紀の心理学批判へとつながっていくアランの心理学論をラニョーの思想と比較検討する。

C．アランの講義草稿・講義録研究。

アランが発表した著作には、心理学について懐疑的あるいは批判的な言辞が随所に見受けられる。しかしそうした発言は、アランがどのような心理学の文献を読み、どのような判断に基づいてなされているのか、実証的に検討することが困難であった。ところで、フランス国立図書館やアランの生地モルターニュにあるアラン博物館には、アランが遺した未刊の講義草稿や、アランの講義を学生が筆記したノートが保管されている。代表者は『感情の哲学』と題された講義草稿の翻刻を作成して博士論文に添付し、そこに含まれるアランの文献調査記録を公刊されたテクストとつき合わせることによって、アランの心理学理解を示す多くの情報が草稿に含まれていることを示した。本研究ではこうした講義草稿や講義録の調査を渡仏時に継続する。

４．研究成果

平成 24 年度は主に 19 世紀末フランスにおける哲学と心理学の関係、なかでも反省哲学派と呼ばれる哲学の潮流と当時の実験心理学および折衷主義哲学の心理学の関係について研究した。具体的には、ジュール・ラシュリエ、ジュール・ラニョー、エミール・シャルチエ（アラン）といった哲学者たちの心理学論について、直接的な影響関係が確認できる 3 人の思想を比較した。この研究成果は、2013 年 3 月に京都大学で開催された日仏哲学会春季大会で発表した。発表の準備にあたって、日本では参照できなかったラニョーに関する博士論文、ラシュリエの書簡集等をフランス国立図書館で調査した。

ジュール・ラシュリエとジュール・ラニョーは、フランス反省哲学と呼ばれる潮流に位置づけられる哲学者であり、哲学と心理学の関係という問題系について、二人の哲学者にはいくつかの共通点を指摘することができる。新しい心理学である実験心理学が姿を現してきた時代に、それらがなお汲み尽くしえぬ領域があると考え、その探求こそが哲学の仕事であると考えた哲学者たちの構想した「精神の真の学」が問題となる。本研究では、反省的分析と呼ばれる哲学の方法をめぐっ

て、ラニョーによるラシュリエ批判が読み取られるという先行研究の指摘を考慮しつつも、両者の形而上学をともに支えているのは、存在への愛とでも言うべき価値論的な議論であることを明らかにした。

アランとその師ラニョーの思想の密接な影響関係はかねてから指摘されるところであるが、心理学に対する両者の立場の違いはこれまで正面から問題にされてこなかった。本研究では、感情とも感覚とも訳することのできる sentiment を、もっとも原初的な認識様態として両者が捉えつつも、アランは sentiment における情感性の構成要件として自由の概念を認めることで、独自の情念論への発展契機とし、実験心理学の感情研究の乗り越えを図る契機としたことを指摘した。

資料収集の過程で予想外の発見もあった。研究対象とするフランスの哲学者アランと日本人彫刻家高田博厚との交流を示す新資料が発見され、これまで由来のわからなかったアランの未刊の草稿との関連が確認された。高田氏の遺族から提供を受けた資料を参照しつつ、アランの草稿の読解を試みた論文を執筆した。これは 2013 年に『仏語仏文学研究』46 号で刊行された。

平成 25 年度は哲学者アランの講義草稿・講義録を中心とした調査研究を行った。特筆すべき結果は以下の 2 点である。１）アランの生地モルターニュにあるアラン博物館で文献調査を行い、1920 年代から 30 年代にかけてアランが寄稿していた心理学雑誌の目録を作成した。これをもとにしてパリのフランス国立図書館で前記雑誌の現物調査を継続した。なかでも『心理学と生活』（*La Psychologie et la vie*）という雑誌は、これまで注目されてこなかったアメリカのプラグマティズムや行動主義とアランの関係を示す資料を含んでいるほか、いわゆる自己啓発の手段としての心理学の普及にアランが関与していたことを示しており、今後のさらなる調査を要する。２）フランス国立図書館では、主にアランの心理学講義に関する草稿調査を行った。1909～11 年とのものと推定される「感情の哲学」（Philosophie des sentiments, NAF17706）を参照し、以前に作成した翻刻を修正したほか、1920 年代の講義録（Cours donnes au college Sevigne. 1913-1923, NAF17704）の調査を行った。後者の講義録はその一部が 1970 年代に『感情の弁証法』（*Dialectique des sentiments*）と題して出版されているが、出版されたものはオリジナル草稿の半分程度を抜粋したものであること、編者による文章の意図的な改変や見落としが多数あり、心理学講義の批評校訂を今後継続する必要があることを確認した。これらの研究成果は現在執筆中のアランに関する単著に反映する予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3　件）

1 新田昌英、日本人への手紙―哲学者アランから戦後日本へ、仏語仏文学研究、査読有、46 号、2013、pp. 57-70.

2 Masahide Nitta, Philosophie des sentiments : une forme primordiale de la théorie des passions chez Alain, *Etudes de langue et littérature françaises*, 査読有, Vol. 101, 2012, pp. 125-138.

3 Masahide Nitta, Repenser l’émotion, la passion et le sentiment chez Alain : dans le cadre de la lecture de ses premières œuvres, Revue de langue et littérature françaises, 査読有, Vol. 45, 2012, pp. 149-158.

〔学会発表〕（計　1　件）

1 新田昌英、反省哲学における心理学と形而上学―ラシュリエ、ラニョー、アランの場合、日仏哲学会 2013 年春季大会、2013 年 3 月 30 日、京都大学（京都府京都市）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
http://psphi.org

６．研究組織

(1)研究代表者

新田 昌英（NITTA, Masahide）
東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
研究者番号：70634559

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：